
犬とコナンと服部と

千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬とコナンと服部と

【Nコード】

N8769D

【作者名】

千景

【あらすじ】

事件の無い日のコナンの1日の話。ある日、毛利探偵事務所を訪れた服部平次。そこには、コナンと一匹の犬がいて・・・

「うっわあ、かわいい」

毛利探偵事務所のドアが開き、耳に飛び込んできた第一声がこれだった。突然の訪問者に、新一は視線をやる。

「いきなり来て、言うことはそれだけか？服部」

「はは、元気にしとったか？工藤。しかし、相変わらずしけた事務所やなあ」

「何しに來たんだよ」

新一は迷惑そうに言い、読みかけの本をテーブルの上に置く。

「なんや、その嫌そうな顔は。こっちに用があったから、ついでに様子を見に来てやったのに。・・・な、それにしてもその犬どうしたん？でつかい、犬やな」

平次は新一の隣に座っている白い大型犬を顎でさす。犬は平次の姿を見て、人懐っこく、尾を振っていた。

「ああ、蘭が預かってきたんだよ。飼い主が今日引き取りに来るって言うてんだけど、まだ来ねえんだよ」

「それで、留守番かいな。あの二人はドコいつてん」

「おっちゃんは仕事で、蘭は空手の試合だと。ったく、俺に犬を押し付けていきやがって・・・俺にも予定があつたんだぞ」

次第に声が不機嫌になってゆく新一の様子に、平次は聞き返す。

「予定？」

「そうだよつ、久しぶりにサッカーの試合を見に行くはずだったのによお、飼い主は来ねえし・・・」

「なんや、それで不機嫌だったんかいな、サッカーなんていつでも見れるやんか」

「せっかくチケット手に入れたのに・・・」

「この犬ええ顔しとるなあ。ごつつう、かわいいやん」

新一の愚痴を無視し、犬の頭を撫でる。意外にも犬好きのようだ。

それを見て、新一は席を立つ。平次に愚痴をこぼしても仕方がない
と思ったのだろう。

「なあ、この犬なんて名前？」

「バロン」

犬缶を手に、新一は席に戻る。そろそろ飯時なのだ。

「しっかし、大きいなあ。工藤お前やったら、乗れるんちゃうか」
「えっ、ばっか、やめろ」

ふいに訪れた浮遊感。気付いたら、抱え上げられていた。子供の
姿である新一は、抵抗も虚しく平次の腕の中だ。あけかけの犬缶の
中身が飛び散り、体に降りかかった。

「ほら、余裕で乗れる。ははは、ごつつう似合つとるわ。かわいい
なあ」

「服部い、その台詞、まさか、俺込みで言ってんじゃねえだろうな」
犬の背に乗せられた新一は、平次を睨みつけた。大体、高校生で
ある男に「かわいいい」などという台詞をはくなんて、もってのほか
だ。

新一は勘違いしたが、平次はもちろん犬に言った台詞だったのだ
が……。

新一が本気で嫌がっているのを見て、平次は面白半分に新一をか
らかう。

「ええやん。今は小学生なんやし、ああ、コナン君、かつわいい」

「バロン、行け」

「え、ちょ、ちょう待ちいや」

平次に飛びかかれという合図だった。それを悟った平次は後退る。
こんなに大きな犬に飛びかかりでもされたら、洒落にならない。

「悪かった。工藤。そんな怒りなや、たんなる冗談やんか」

「知らねえなあ。・・・バロン、やってしまえ！」

その声にバロンが起こした行動は、新一の思惑とは反するものだ
った。

「わああっ、ばか、やめろ」

「工藤・・・？」

何をどう解釈してそうなったのか、バロンは背中に乗る新一に向かって飛びかかった。新一の体には先程飛び散らせたドッグフード（生タイプ）がついている。バロンは尻尾を激しく振り、実に楽しそうに新一の顔をナメていた。これでは、じゃれているのか、ドッグフードが目当てなのかよくわからない。

「くすぐったいつ、やめろってば！」

「・・・なんだかなあ」

平次は新一と犬がじゃれているのを見て拍子抜けした。これではちよつとびびった自分が馬鹿みたいだ。

（しかし、他の奴らが見たら、まるつきり犬に襲いかかれている子供の姿やろうなあ）

「ははっはは、本当にくすぐってえ。やめろったらっ」

バロンには新一の言うことを少しも聴く気がないらしい。新一は我慢できずに笑い転げている。実に微笑ましい姿だ。

（はは・・・誰もこいつの中身が高校生やなんて言っても信用せんやろうなあ。ホンマ、ごつつう可愛いんですけど・・・って、何言うてんねん俺！）

最後の方は無意識に思った事だった。頭に血が上り、顔が赤くなる。平次はハッと我に返り、一人で自分の台詞にツツコミを入れた。（いかん、あいつの外見に、騙されたらあかん！相手は高校生やぞ、しかも男相手に何考えてんねん！今のはナシや、今のはナシっ）

頭を激しく振り、浮かんだ言葉を吹き飛ばそうとする。

「服部い！み、見てないで、助け・・・ろ、ははっ」

「お、おおっ」

新一が、苦しそうに喘いでいるのを見て、平次は慌ててバロンを取り押さえようとするが、バロンはそれを遊んでくれるもだと思いい、今度は平次に飛びかかった。

大型犬の力は半端じゃない。ちよつとじゃられるだけでも一苦労だ。また、バロンはそこの大型犬よりも一回り大きかった。種

類分からないが二本足で立たれると、平次の身長と同じぐらいになる。

「この、アホ犬っ、人間様をなんだと思ってんだ！いい加減、大人しくせえ！」

「バロン！」

しばらく息も絶え絶えになっていた新一は、ようやく起き上がり、平次に加勢する。バロンは意外にすばしく、いっこうに大人しくする様子もない。二人の呼びかけも、いつしか懇願のそれへと変わっていた。暴れたせいで、ドッグフードや色々なモノが散乱し、見るも無惨だ。

「何をしてるのあなた達！」

その時だった。部屋中に一喝が飛ぶ。その声に驚き、あれほど言うことを聞かなかったバロンの動きがピタッと止まる。二人ももちろん例外ではない。

ドアの前にはいつのまにか蘭の姿があった。その顔が真っ赤になっている。そうとう怒っているようだ。部屋の状態を見れば無理もない。新一は蘭の様子に一気に血の気が引く。

「蘭姉ちゃん……」

「おお、帰って来たか。邪魔してるで。」

「ちよつと……練習試合から疲れて帰ってみれば……なんのよこのありさまは」

「帰って来てくれて助かったわ。ちよお、聞いてくれるか、このあほ犬がなあ……」

「は、服部っ」

何の悪びれもなく蘭に話しかけようとした平次に、新一は慌てた。蘭の幼なじみである新一には、今どれだけ蘭の機嫌が悪いのかよくわかっていた。声を張り上げるのでもなく、逆にトーンを落として喋る。こういう時に話しかけるのは相当マズい。そっとしておくのが一番なのだ。

「部屋、片付けといてよね、二人とも」

「は、はい、蘭姉ちゃん」

「なんや、俺も？俺は客やで？」

「ばっか」

事務所を出ようとしていた蘭の足がピタリと止まる。新一にはその動きが恐ろしかった。

「何か・・・言った？服部君・・・」

ゆっくりと振り向く蘭の額に青筋が見える。顔は笑っているが、拳をバキバキと鳴らしていた。

「な、何でもありません。ほな、片付けよかー！ぼうず」

有無も言わせぬ蘭の様子に、平次はようやく悟る。（こわい・・・）

「そう？気のせいだったかしら。バロン・・・邪魔しちゃだめよ」
バロンは床の上に寝転がり、腹を上に向けてクンクンと鳴いている。犬は正直だった。

事務所の扉が閉じ、新一と平次はほっと肩を撫で下ろす。

「こっわあ。ありや、半端やないぞ」

「はははは」

新一には笑うしかなかった。

「しかし、これ、二人で片付けるんか」

部屋を見渡すと、よくこれだけ散らばったものだと思う。見るだけで気が重くなってきた。

結局全てを片付けるのに三時間を要した。ただ、顔を見に寄っただけなのに、何故こんな事になってしまったのか。

思わぬ重労働に、新一はすっかりバテてしまい、ソファアの上で、寝息をたてている。

（やっぱ、体が小さいと体力も違うもんか）

平次はこっそり、新一の顔を覗き込み、そう思った。

中身が高校生でも寝てると小学生。ちょっと可愛いかもと、よぎった言葉を頭のスミに追いやりつつ、でも、意外に楽しかったかな。

と思い直す。

（そやな、掃除はしんどかったけど工藤といると、飽きへんかったな）

また暇な時来よう。平次はそう思い、事務所を後にするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769d/>

犬とコナンと服部と

2010年10月8日15時56分発行